

【第16回年次大会 シンポジウム：海外交流の中でのジェンダーの諸相 要旨】

火の女神と、神になった男——女性陶工の生き方を通して

朴正一

文化の伝播とその受容は、戦乱によることが多い。

16世紀、豊臣軍の大名達は朝鮮女性の中で茶道、工芸、料理、裁縫にたけた人々を大勢連れ帰って来た。その中に、後の日本陶磁器産業に大きな影響を与えた女性陶工がいた。

慶尚南道の金海から福岡武雄の領主・後藤伯耆守象信が金宗伝夫婦を連れ帰り、武雄町に内田窯を開かせ、現在では有名な黒牟田焼きとなったのだが、金宗傳の夫人は優れた陶工であった。夫の没後、夫人は九百数十名の陶工集団を養い、やがては有田焼の礎となり、百婆仙と呼ばれた。火の芸術でもある陶磁器の焼成に、横架式ゼーゲルで窯の温度を測る技術を既に会得していて、安定した陶磁器生産をすることができた。現在、百婆仙は武雄市内田町報恩寺に眠っている。

一方、同じく渡来した李参平、後の金ヶ江三兵衛には、この技術はなかったが、泉山の磁石の発見の功などで、有田の陶山神社に神として祭られた。

日本では生前功績が大きいと、神社に祭られることがあるが、朝鮮時代の官窯であった分院で、女性の沙器匠は稀であった。因みに、高麗媪という女性陶工などもいたが、男性優位の職域環境の中で、劣悪な境遇を克服した百婆仙のような女性は稀有な存在であり、女性の能力の高さを表している。

(パク チョンイル・釜山外国語大学教授)